

地域全体での医薬品適正使用を推進
研修会の開催により
処方箋検査値印字による情報共有

薬剤部・薬局訪問 第103回 九州大学病院 薬剤部



【九州大学病院】
福岡県福岡市東区馬出3-1-1
●病院長:石橋達朗
●病床数:1,275床
●外来患者数:1日平均約3,000人
●外来患者への処方箋発行枚数:1カ月平均約19,470枚
●処方箋発行率:90.3%
●薬剤師数:89名
(2016年1月現在)

九州大学病院は「患者さんも、医療人も満足する医療の提供」を理念に掲げ、診療・研究・教育に取り組んでいます。薬剤部もこの理念に則り、先進性と専門性を2つの柱としてチーム医療、地域医療に貢献しています。

また、2015年からは処方箋への検査値印字による保険薬局への情報提供を開始し、検査値や疑義照会に関する研修会を定期的に開催しています。これらの取組みについて、薬剤部長の増田智先先生、副薬剤部長の渡邊裕之先生、薬剤師の福田未音先生、田中瑠美先生に伺いました。

他職種との信頼関係構築を進め
病棟業務や共同研究に注力

●●●薬剤部の方針をお教えてください。
増田 大学病院の薬剤部として専門性を発揮し、地域において指導的な役割を担える薬剤師の育成に努めています。

病棟業務では、医師をはじめ他職種との信頼関係構築に励んでいます。医薬品適正使用においては、他職種の要望に応えつつも、薬剤部としての方針を示して理解を得ることが重要です。また、一定レベルの業務を継続するためには、個人的な信頼関係ではなく、薬剤部全体として信頼を得ることが大切だと考えています。

●●●信頼を得るために、どのような事柄に重点を置かれていますか。

渡邊 ツールなどを作成し、業務の標準化を図っています。病棟では、看護師や医師から副作用や配合変化などに関する質問をよく受けます。そこで、病棟の特性に応じて代替薬リストや配合変化一覧表などを使い、経験の浅い薬剤師でも均質な回答が行えるようにしています。

福田 私が担当している第二外科は、乳腺・消化管・肝臓・膵臓など多領域にわたり、抗がん薬治療の多い診療科です。当院薬剤部が作成したス

ケジュール用紙を用いて全入院患者さんへの指導を行い、その用紙を医師・看護師とも共有しています。副作用の早期発見にもつながるので好評を得ています。

田中 昨年まで担当していた循環器内科は多剤併用の患者さんが多いため、担当時には副作用や相互作用、検査値について詳細なチェックを心がけていました。

●●●その他に、力を入れている取組みをお教えてください。

増田 日常業務だけでなく、研究活動においても他職種との信頼関係は重要です。症例報告や臨床研究など、診療科と共同での論文作成を奨励しています。

先進的な試みとしては、抗がん薬調製支援装置を企業と共同開発しています。これは、薬剤の照合から調製、重量鑑査、容器洗浄・廃棄までを全て自動で行う装置です(写真1)。薬剤取り揃えや調製手技のミスの低減だけでなく、抗がん薬の曝露防止など、スタッフの安全確保にも貢献しています。

写真1



全自動の抗がん薬調製支援装置。ヒト型双腕ロボットがきめ細かな動きで抗がん薬を調製する。
提供:九州大学病院薬剤部

処方箋検査値印字により
保険薬局との情報共有を図る

●●●地域の保険薬局とは、どのように連携されていますか。

渡邊 保険薬局にも、より積極的に医薬品の適正使用に関与してもらえよう、2015年6月、処方箋への検査値印字による情報提供を開始しました(図表)。

印字開始にあたっては、福岡県全域と福岡市内の保険薬局を対象に、当院薬剤師の指導による研修会を実施しました。研修会は運用開始前に複数回行い、薬剤師として検査値を見る意義やその見方(副作用チェックや用法用量の判断など)、添付文書など根拠に基づく疑義照会の方法について講義を行いました。現在も近隣保険薬局を対象に、月1回の勉強会を継続しています(写真2)。

写真2



院外処方箋への検査値印字開始にあたり、保険薬局を対象に研修会を開催。
提供:九州大学病院薬剤部

●●●検査値印字開始に対する、薬局薬剤師からの反響はいかがでしたか。

渡邊 非常に賛同していただけました。福岡市薬剤師会からも「薬局薬剤師の職能向上につながられる」とご支持をいただき、スムーズにスタートすることができました。

●●●研修会の主な内容について詳しくお聞かせください。

田中 研修会は、実臨床に近い形で行う方が理解してもらいやすいと考えました。そこで、免疫抑制剤、抗がん薬、糖尿病治療薬、小児科領域の薬物療法といったテーマを設け、実際の処方例を提示し、検査値と照らし合わせながら確認すべきポイントなどを説明しました。

福田 糖尿病治療薬の講義では、HbA1cはもちろん、腎機能の状態を把握するための血清クレアチニン値

図表
院外処方箋への
検査値印字例

項目	基準範囲	結果	検査日	項目	基準範囲	結果	検査日
WBC	4,000-10,000	12,000	2015/05/28	T-Bil	0.0-1.0	0.2	2015/05/28
Neut	40-70%	75%	2015/05/28	eGFR	15-60	18	2015/05/28
Hb	12.0-16.0	11.5	2015/05/28	CK	0.0-1.3	0.8	2015/05/28
PLT	100-400	150	2015/05/28	CRP	0.0-0.5	0.1	2015/05/28
PT-INR	0.8-1.2	1.0	2015/05/28	K	0.5-1.5	0.8	2015/05/28
AST	0-40	15	2015/05/28	HbA1c	5.7-6.4	6.5	2015/05/28
ALT	0-40	12	2015/05/28				

提供:九州大学病院薬剤部

やeGFRといった検査項目や検査値、また添付文書の見方などを解説し、処方鑑査時に薬剤部で活用している書籍などの情報も紹介しました。

また、高齢者は複数の医療機関を受診していることが多いため、目の前の処方箋だけでなく、お薬手帳などで処方されている全薬剤を確認する必要性も説明しました。

田中 検査値が基準範囲外であっても、薬剤の影響によるものか判断が難しく、疑義照会すべきか迷うケースも少なくありません。患者さんから症状や服薬状況など、お薬手帳に記載されていない情報



薬剤師 田中 瑠美先生

も含めて詳しく聴取し、総合的な情報を得ることの重要性もお話しました。渡邊 迷ったら疑義照会してほしいと伝えています。臆せずに医師と連絡を取り合うことで、処方意図がわかり、知識も増えていくからです。

検査値印字開始から3カ月間で、検査値に関連する保険薬局から当院への疑義照会は約50件にのぼり、医薬品の適正使用につながっていると実感しています。

地域全体の薬剤師の職能向上に
更に貢献していきたい

●●●今後の抱負をお聞かせください。

田中 現在、各保険薬局での疑義照会内容のデータを集集中です。その結果を参考に、近隣保険薬局との勉強会

の内容をブラッシュアップしていきたいと思います。

福田 第二外科病棟では、PBPM*のスタートに向けて準備を進めています。安全かつ質の高い化学療法の実践に向けて、がん薬物療法における制吐剤セット処方や皮膚障害セット処方などのプロトコル作成を始めており、更に充実させていきたいと考えています。

渡邊 抗がん薬調製支援装置のような先進的な取組みも重要なテーマです。様々な取組みの成果は全国に発信するのはもちろんのこと、これからの薬剤師業務をリードし、また、チーム医療の一員として、薬物療法の更なる発展に貢献していきたいと考えています。

増田 外来での服薬指導にも力を入れてきたいと考えています。現在、経口抗がん薬を服薬する患者さんを対象としていますが、糖尿病や喘息などへの拡大も視野に入れています。

機械化・IT化の推進も重要ですが、一方で、きめ細かなコミュニケーションが必要な服薬指導やチーム医療など、機械には替えられない業務を担う薬剤師の育成も不可欠です。大学病院としての期待に応え、診療・研究・教育において様々な取組みにチャレンジしていきたいと思っています。

*PBPM: Protocol-Based Pharmacotherapy Management (プロトコルに基づく薬物治療管理)



薬剤師 福田 未音先生